

ルカ 16・19-31

今日のイエスさまのお話は、一度聴いたら忘れることが出来ない不気味さを秘めています。そのことに気づいているわたしたちは、聖書の中のこのイエスさまのお話だけは、あまり読み返したいとは思わないのが正直なところかもしれません。このお話には、わたしたちの良心を刺す棘のようなものを感じずにはいられないからです。「福音」が喜ばしいメッセージという意味であるなら、どうしてこのようなイエスさまのお話が福音と言えるのでしょうか。

今日のイエスさまのお話は、この世の生活と死後の陰府の世界の二つの場面から構成されており、その中で場面が変わると、二人の登場人物の運命は全く逆転しています。ラザロのような境遇を生きざるをえない多くの人々にとって、イエスさまのこのお話は、どのように響くのでしょうか。ラザロにとっては、この世の生活を生きるかぎり、状況は何一つ変わることはないのです。彼に与えられる唯一の慰めはイエス様が語られた死後の世界への希望の中にしかないのです。金持ちの家の門前で、誰にも顧みられることなく、見捨てられた人として生涯を終えたラザロにとって、イエスさまのこのお話は彼の生きる力を支える福音となったのでしょうか。

他方、死んで陰府の世界に落ちた金持ちにとっての死後の世界は全く絶望的です。彼の願いはもはや何一つ聞き届けられることはなく、どんなに願ったとしても、陰府に落ちてはじめて気づいた、自分の生き方をやり直すことはできないのです。この結末は、わたしたちにはあまりにも陰惨なものであり、そのようなことを考えると、言いようない恐怖しか感じられないと言わざるをえません。わたしたちがこのように感じるとするなら、イエスさまの今日のお話には、それだけの迫力があるからです。その迫力に圧倒されつつも、イエスさまがこのお話によって何を語ろうとしておられるのか、なおも耳を傾けなければなりません。

陰府に落ちた金持ちが見上げると、天の宴席に着いているアブラハムとその側にいるラザロが見えたと言われています。金持ちは陰府の底からアブラハムに向かって父よと呼びかけます。その叫びに対してアブラハムも「子よ」と応じていますが、金持ちはもはや、アブラハムにすぎることは出来ないのです。「わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ

渡ろうとしても出来ないし、そこからわたしたちの方に越えてくることも出来ない」。

陰府に落ちた金持ちに対する天の宴席からのアブラハムのこのことばは、イエスさまが語るこのお話を聞いたユダヤの人々の耳にどのように響いたのでしょうか。彼らは旧約聖書に語られているアブラハムが自分たちの父であることを誇りにしていたのです。中でも、ファリサ派と呼ばれる人々はイエスさまが語られたように、死後の世界と死者の復活ということを感じていたと言われています。そのような人々に対して、イエスさまはその人々の信仰と実際の生き方との間に深い亀裂を覗かせている溝を指摘しておられるのです。

「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返るものがあっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」というアブラハムのことばは、聴いている人々へのイエスさまご自身のことばです。その人々は、彼らが大切にしているモーセの律法と預言者たちのことばを通して何が命じられているかを知っているはずなのです。今日のミサの中でわたしたちも聴いた預言者アモスのことばや今日歌われた答唱詩編のことばは、その人々が何度も聴いて口にしたり、聖書のことばであったはずですが、けれども、イエスさまの目に映る人々の姿は、アモスが語った時と全く変わってはいないのです。今日のイエスさまのお話の言いようのない暗さと不気味さは、そのような人々の姿を目にされた深い嘆きから発せられているのです。

あのか、イエスさまがユダヤの人々に語られ、今日わたしたちが聴いたイエスさまのおことばは、あのかと同じように、今日わたしたちに向けられています。わたしたちも聖書を知り、イエスさまを知り、復活のいのちを知った者たちとして、この世界に生きるわたしたちに神が何を求めておられるかを知っているはずの者たちだからです。

今日のイエスさまが語られる死後の世界は、わたしたちにはあまりにも恐ろしく思えます。けれども、わざとこのようなお話をすることによって、イエスさまはこのようにことになる前にとわたしたちにも語りかけておられるのです。目の前にうずくまって、ものも言えずにいるラザロに目を留めるべきではないかと語りかけておられるのです。

イエスさまの今日のお話は確かに、わたしたちにはあまりにも暗く、不気味すぎて、直ちに喜びをもって受け入れることは難しいかもしれません。

けれども、イエスさまの福音はその全てが、わたしたちがそれを聞いて心慰められ、励まされる神さまの大いなる憐れみの愛による救いの約束を語るだけではありません。むしろ、今日わたしたちが聴いたように、わたしたちのあり

ようを問いただし、回心を促すおことばでもあるのです。それらのおことばがわたしたちにとって、真の福音となるのは、わたしたちがイエスさまのおことばを受けとめることによって、自分自身のありようを変えることができたときです。つまり、イエスさまのおことばに従って回心することが出来た先に、わたしたちはイエスさまのおことばが、わたしたちにとっての真の福音であることを悟ることが出来るのです。そのような意味でイエスさまの福音は常に、わたしたちへの問いかけであり、真の幸福への招きです。わたしたちにとって信仰とは、イエスさまがそのおことばをもってわたしたちに呼びかけておられる真の幸福への招きに気づき、それを受け入れて行くということです。

ラザロのような状況を生きざるをえない時、わたしたちには、イエスさまが語られた、この世の生の彼方においてラザロを待っている、アブラハムとともに味わう天の宴席の喜びを信じて、この世のむごい現実を生き抜く力を得て行くことが求められています。ラザロのような境遇の中で、イエスさまがラザロに保証してくださった喜びを信じて生きるということは並大抵のことではありません。しかし、それが十字架の死を超えて復活されたイエスさまのわたしたちに対する信仰の招きなのです。

わたしたちの現実の生活は、イエスさまのお話の金持ちの暮らしぶりとはほど遠いものです。ぎりぎりの生活と将来の不安の中で、それでも多少のゆとりができれば、少しの贅沢は家族のためにも許されるのではないかというようなところで多くのわたしたちはつつましく生きているのが現状かもしれません。今の社会に生きるわたしたちはそのような幸せを求めて生きています。けれども、そのようなわたしたちにも、このお話を通してイエスさまが求めておられることに変わりはありません。この地球上に、ともに生きるより貧しい人々への心配りを忘れ、自分たちの幸せだけを願って、それを脅かす生活不安だけに心を奪われるとき、この地上には、今日イエスさまが語られたラザロとあの金持ちを隔てる絶望的な溝が広がってゆくのです。今、わたしたちが回心しなければ、わたしたちの世界はお互いの間に溝を深めるだけの、それゆえ、あの金持ちが陰府の世界で直面することになったような、神が望まれる世界とはほど遠い、救いのない世界に落ち込んで行くしかないことになります。このことの中に、今日のイエスさまのお話の、今のわたしたちの世界に対する警鐘を聴き取るべきかもしれません。そのイエスさまの告げる警鐘に心を向け、イエスさまの求めておられるわたしたちの生き方の転換がなされる時、今のわたしたちの世界を分断する、持てる者たちと持たざる者たちとの間の、不気味な壁が乗り越えられ、真の平和への道が開かれることになるのではないのでしょうか。イエスさまの今日のおことばを、わたしたちの世界とそこに生きるわたしたち一

人ひとりを、そのような真の人間同士の関わりが実現する世界へと導こうとされているイエスさまの福音として受け止めて行きたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高